

「幼児期」における発達課題について

—基本的生活習慣・母親の期待像等を中心として—

梅津 迪子（女子聖学院短期大学）

幼児教育、基本的生活習慣、発達課題

はじめに

文部省は、幼稚園教育の中で人とかかわる力、自然との触れ合い、基本的生活習慣等の強化を推め、小学校低学年には「生活科」を取り入れる方針を発表した。

このことは、現代にみられる子どもの三無主義傾向や、「青い鳥症候群」「モラトリアム人間」といった若者の現象を反映したものと推察できる。

身体面ではからだの持続力不足、身体の「モノ化」、指示待ちの身体に変化されている傾向がうかがわれ、精神面では個人主義からくる仲間との共同性維持の欠如・若者の未発達、未成熟から生じる人間関係のまずさが指摘されている。

このような状態は社会・文化の変化に伴って核家族化、少子家族化、両親の役割不明確家庭の増加を招き、その結果、家庭教育機能の衰退と、機能そのものが社会への外在化へ転嫁しつつあるためと思われる。

それにともなって、都市型の核家族にみられる現代の母親の育児不安は、母子関係の孤立化に深くかかわっており、母親の行動が幼児に良い面でのモデリングの効果をもたえないことから、子どもの自立性は育ち難いことが言われている。

また、この育児不安が母親の余暇感、余暇行動をもたえないことも指摘されている。

研究の目的

親の養育態度は、時代や文化の影響を受け多くの要因によって変化するものであるが、現実の社会状況のなかで、今の学生達の将来が、育児不安から生じる余暇感、余暇意識へのゆとり、余暇行動参加への期待等がマイナスの方向へ行くことが予想される。

幼児期における「何が出来なかったか」「何を失ったか」を問うところみはなされていない。また、幼児の発達や行動を調査したものは多いが、現在の若者の「幼児期」についての調査はされていない。

そこで現在の若者像をふまえながら、学生の「幼児期」に焦点をあて、発達状況と親の養育意識、行動の実態を把握することにより、「どこにどんな問題があるのか」を探り出し、

1. 幼稚園教育（集団保育）のあり方

（幼児の保育についての社会的場づくりの設定に関する問題）

2. 家庭のしつけのあり方

3. 学生の余暇行動に参加させるための指導方法等の研究の予備調査とする。

研究の内容と方法

文部省の幼稚園教育指導要項と厚生省の保育所保育指針から六領域（健康・言語・音楽リズム・絵画製作・自然・社会）を領域別に、目的、内容、方法を分類、領域別に年齢（3、4、5、6、）と発達課題を検討。

幼児期における基本的生活習慣の内容を年齢別に分類し、各領域と関連させながら発達達成度を把握するため質問事項を作成した。

質問事項はⅢ部から構成されており、

I. 「幼児期」当時の家庭形態、母親の出産年齢、当時の仕事、主に育児に当たった人、子どもの通園、幼児の頃の基本的生活習慣の自立年齢、親の養育態度、居住地に関するもの。

II. 六領域と基本的生活習慣に関係するもの。

76問（質問用紙2枚）

III. 子育てに関係するもの。7問

親のみ記述式で記入

以上4枚を学生と親にアンケート調査した。

現在、18歳の学生の「幼児期」についての質問である。

調査対象

埼玉県	S短大（女子）	235名	
東京都	M短大（女子）	118名	
東京都	M大学（男子）	108名	計 461名
	その親（S短大、M短大）	282名	

調査時期

昭和61年 7月

結果と考察

「幼児期」における領域「社会」から、社会的習慣育成についての諸問題を掘が考察、領域「音楽リズム」の立場から遊戯行動についての考察を深山が担当し、領域「自然・社会・健康」から遊びとの関係についての考察を松浦が担当、本人は基本的生活習慣と発達課題、母親の期待像を中心として考察する。

I. 「幼児期」における基本的生活習慣と発達課題

1) 幼児期における基本的生活習慣とは

基本的生活習慣とは、日常生活のもっとも基本となる食事・睡眠・排泄・衣服の着脱・清潔に関する習慣をいう。この習慣をひとりではできないという行為が自我の形成を培い独立心、自立心を育て、やがて社会生活（集団の場）への適応化に伴って生きる力となっていく。

従って、習慣は毎日反復されることにより確かなものとなる。

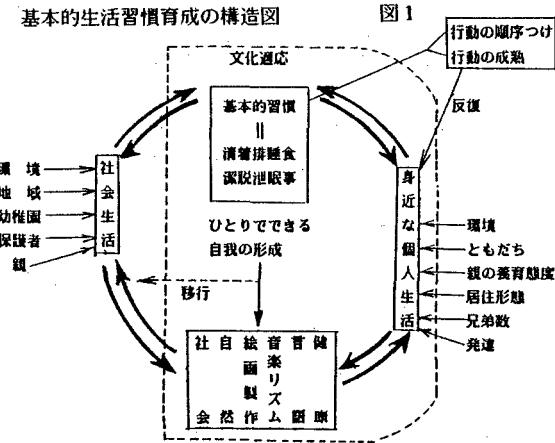
それには行動の順序づけがなされていなければならない。
 (例えば、朝起きるとおはようの挨拶ができ、顔を洗い、
 歯をみがき、自分で服を着る………)

その行動も、発達に即した方法をとることが大切であり、
 幼児の心理的特徴の把握と、身体諸機能の成熟、なかでも
 運動機能の発達を考慮し、行動の成熟を待って親も保育者
 も指導することが望ましい。

一連の行動も周囲の社会・子どものまわりの文化が求め
 ている所に合うように生活する仕方を身につけていかなけ
 ればならない。

このことをケゼルは「文化適応」と名づけているが、適
 応した生活ができるような習慣をつけることが習慣の第一
 歩と述べている。そうした習慣は、家庭生活の中で特に、
 幼児期においてつけられるべきものであり、親の意識、行
 動が影響すると思われる。

したがって家庭での基本的生活習慣を土台として、幼稚
 園教育の六領域の中にも同時に平行して生かされていくこ
 とが望まれる。各領域での体験が、個人の基本的生活習慣
 をさらに確かなものにしていくであろうし、その関係は家
 庭と領域がフィードバックされる状態である。



2) 幼児期における基本的生活習慣の発達課題

ゲゼルは、5歳すぎると幼児は彼としての一つのまと
 った人格をもつようになるというが、その有力な条
 件の一つは基本的生活習慣である。

そして、基本的生活習慣における自立ということが、幼
 児の性格の発達形成に、きわめて重要な意味をもつと考
 られている。

それは、個人的側面の自立だけでなく、社会集団の1人
 として位置づけさせることも必要であり、幼児は集団の中
 で、集団の力で発達することから、社会の中で適応する方
 法も身につけなければならない、それには年齢と発達の関係
 が中心となる。

表1は、習慣の形作られて行く全体の流れが、年齢との
 関係において発達的にはっきりしてくる様子を表している。

基本的生活習慣の発達課題 表1

習慣	年齢	内容	
		発達課題の内容	
食	1.0	茶碗をもって飲み、スプーンが使える	
	2.0	手を洗う	
	2.6	はしと茶碗、スプーンと茶碗(両手で)	
	3.0	いただきます、ごちそうさま、挨拶ができる。こぼさないで食べられる	
	3.6	手伝ってもらわないで食べられる	
便	0才	ひとりでする(排便をしない)	
	4.0	排便時にトイレに行く 夜間便に覚悟する 排便時の挨拶をする	
排	2.6	誰かについていけばひとりでする	
	3.0	パンツをとってあげればひとりで行ける。トイレでノックする	
	4.0	完全にひとりで行ける。手を洗う	
	4.6	紙を使って始末ができ完全自立	
衣	2.0	ソックス、帽子が脱げる、服を脱ぐ	
	3.0	ボタンをはずしたり、かけたりできる	
	3.6	衣服を自分で着る	
	4.0	袖を通し、前後を間違えない	
	5.0	服装行為の完全自立	
清	2.6	手を洗う	
	4.0	顔を洗う、顔を拭く、うがい、鼻をかむ、歯をみがく	
	5.0	口をすすぐ、髪をとかす	

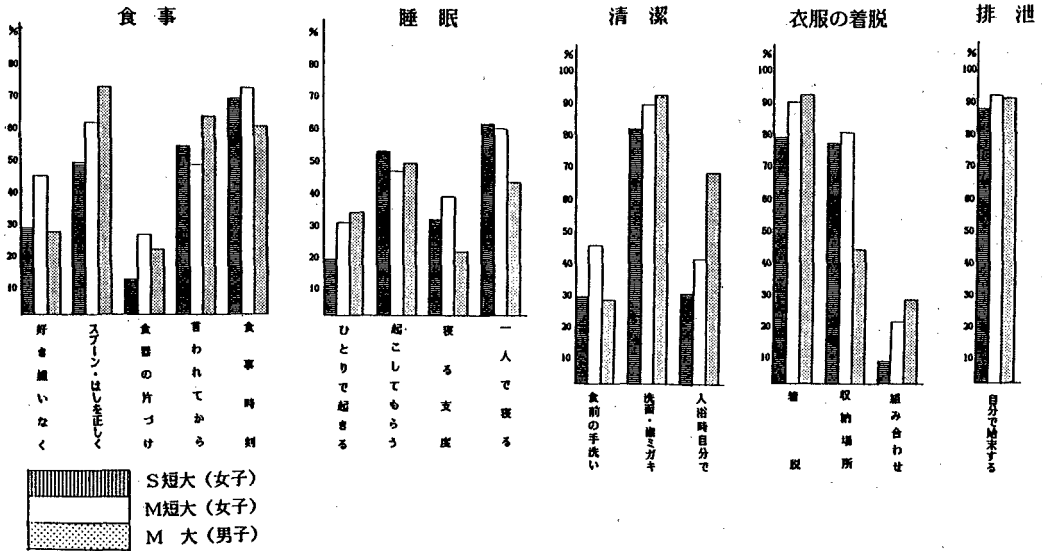
3) 基本的生活習慣における発達課題の学校別・男女差
 現在の幼児期の基本的習慣を調査したものは多くみられ
 るが、現学生達の15年前の「幼児期」に焦点をあてたも
 のはみられない。ゆえに記憶をひもときながらの回答であ
 り、記憶の程度、基本的生活習慣の内容解釈の個人差も当
 然考慮されなければならないが、傾向をみることはできよ
 う。

男女差が顕著にみられたのは、スプーン、はしが正しく
 使える、の項目で男子が女子より16.3%高く、入浴時自分
 で体を洗ったり、拭いたりできるという点では女子との差
 が30.9%あったことである。その他、わずかながら女子と
 の差がみられるのは、1人で起きることができる、衣服の
 組み合わせ、洗顔、歯ミガキが自分で行えるという項目で
 あった。

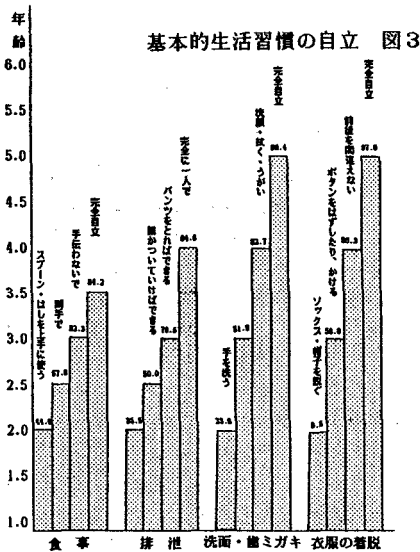
男女差はみられても全体的には、1人で起きられる項目
 も34%であり、衣服の組み合わせも30%に満たない。こ
 うした点からも自分でやらせるとい親の意識や準備が不足
 していることが分かる。そして、男子が女子より低い項目
 では、寝る支度、食前の手洗いに關して10%低く、特に1
 人で寝るとい項目では、女子は60%以上が1人で寝て
 いるのに対し、男子は43.5%と18.7%の差がみられた。

このことは、住宅事情によるのか、親の男の子に対する
 接し方が過保護であるのか、本人の自立心の欠如のためな
 のであろうか。

基本的生活習慣の達成率 図2



4) 基本的生活習慣の自立について



歩行は、個人差はあっても 1.3 年でひとりでするようになるのが普通である。ここでは、早い人で8ヶ月から歩行が始まり93.7%が1.3年で完全歩行している。これは平均的な発達であることが分かる。歩行は個人の発達ゆえ、兄弟数の影響はみられなかった。

人見知りは、生後半年経つと周りの知っている人と見えない人の区別ができるようになり、そのため機嫌が悪くなったり、泣いたり、顔をかくしたりする行動である。一面では、社会性の成長の一つの段階といわれ、ここを通過して未知の人と接触していくことができるのであるが、7~8ヶ月までに人見知りをしたのは33%、人見知りをしないのが、29.3%、人見知りの内容を理解できていないのか

1歳以上と回答したものが27.1%もあり、1才から6才までの開きがみられた。人見知りをしないのが1/3近くみられるのは核家族の中で、外部の人と接触の場や、接触回数が不足のためと思われる。

図3が示すように、自立が一番早いのは食事である。手伝わってもらわないで食べられるのが3.5歳であるから、84.2%が達成しているのは平均的発達である。しかし、食事の内容(こぼさないで食べられる。はしが上手に使える。食事時間20分位)の確認はされていない。排泄は紙を使って始末ができるのが完全自立としている。4才で94.6%自立している結果になっているが、親の排泄に対する意識の程度に差があることから、評価に点の甘い、辛いがあり、判断基準がまちまちであることを考慮しなければならない。

洗顔、歯磨きの面にしても、2歳で手を洗う基準から見ると23.8%は低いと言わざるをえないが、今までの発達状況から考慮して、手の動きが劣っているのではなく、親の清潔に対する関心度が低いため、行動を促し、自ら進んでできる環境に導かないのではないかとと思われる。

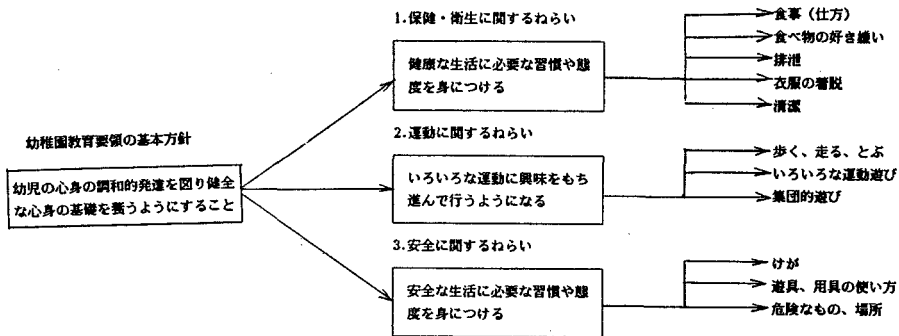
5) 領域「健康」における内容達成率の親子の差異

①「健康」の内容とは

図4に示したように、幼児の発達に即して3つの立場から具体的な経験や活動することをねらいとしている。

しかし、幼児の生活は常に全体的なものであり、生活全般にわたって関連したものであるから、身体の健康に関するものを中心として、他の領域とあわせて総合的に捉えなければならないであろう。また、「健康」での活動は領域「社会」「言語」との関連が密接である。(図4参照)

領域「健康」の内容 図4



「健康」親子同一項目達成率 表2

ハイと答えたもの(60%以上)

兄弟数	項目	外遊びの 方が好き	同年齢と あそぶ	危険な 場所	備考
ひとり	学生26				65.4
	親 25				84.0
二人	学生46		65.2		65.4
	親 48		69.6		78.3
	学生63			69.8	65.4
	親 27			88.5	92.3
	学生48	66.6	68.6		64.6
	親 26	70.3	70.3		78.4
三人以上	学生52		81.5	65.4	
	親 48		81.7	82.9	

親子間に差異がみられる項目

兄弟数	項目	家の中で 絵本	ボール あそび	同年齢と あそび	危険な 場所
ひとり	学生26	38.5			53.8
	親 25	68.0			88.0
二人	学生46				53.8
	親 48				71.7
	学生63	44.4		53.2	
	親 27	65.4		68.8	
	学生52		45.8		56.3
	親 48		64.9		83.8
三人以上	学生52				
	親 48				

ここではS短大のみにおいて考察する

「健康」の23項目のなかで親子ともに60%以上達成していたとされる内容は、基本的生活習慣と同様であるが、全体的に親の方が達成されていたとする率が学生より高くみられることである。
 (基本的生活習慣と重なっている項目図4-1は省略する)表2が示すように、学科別による違い、兄弟数による違いがみられ、あそびの活動

II. 子どもに対する母親の期待像

1) 母親像の特色

今回の調査では、家族形態は核家族66.4%、家族以外同居は33.6%であり、子ども数はひとりっ子14.1%、2人が63.2%、3人以上が22.7%であった。3人以上の兄弟では出生順位3番目の人が多くみられ、母親の出産年齢も26~30歳までが42.3%、次いで21歳から25歳までが41.6%、そして31歳から35歳までが15.4%となっている。

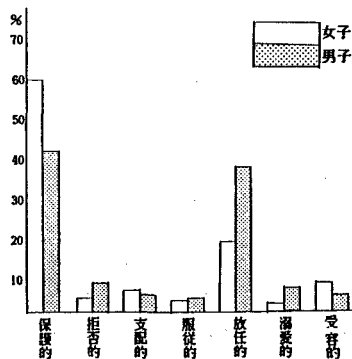
80%以上が、30歳までに2人の子どもを出産し、育児にあたる年齢は20代~30代のはじめと思われる。

子どもを育てる環境は住宅地、次いで団地、マンションと続き、当時の母親の仕事の状況は有職者27%、パート7.3%、無職65.7%であるが、パートを含めると1/3は仕事をもっていた事になり、無職の中にも内職を記入した者が10名みられた。

主に保育に当たった人は父母が86.7%と多く、祖父母と一緒に記入したものが13.2%であった。

そして、親の養育態度は(子どもからみた)図5のように、保護的な親が全体の55%を占め、兄弟数から分析すると、ひとりっ子、

親の養育態度 図5



としては、児童教育学科(兄弟数2人)だけが66.6%であるのは、外あそびを親子とも好んでおり、同年齢の子とのあそびが多くみられる。しかし、あそびの活動に関しては、親子間にかかなりの差がみられ、家の中で折り紙をしたり、絵本を読んだり、絵を画く方が好きでしたかと言う点では、ひとりっ子の親子間の差は約30%近くもあり、国文科においても同様の傾向がうかがえる。表2以外の項目にもこのような傾向がうかがえるが、この差は幼児期のあそびに対する記憶の薄れであろうか。子どもがどんなことをしてあそんでいるか、どんなことを好んで活動しているかを注意深く、関心をもって観察していれば、また、別の違った傾向がみられたのではないだろうか。

と、ひとりっ子、2人の親は保護的が65.4%となり、3人以上になると保護的な親は半分に減少し、42%が放任的、次いで保護的な親が35.4%と続く。
 やはり、子ども数の増加に伴い、親の養育態度も変化していくのが分かる。

2) 両親の養育態度からみた子どもに対する
母親の期待像

親の子どもに対する期待像 図6

目 標	内 容	方 法
1. 思いやりのある子に	やさしい、素直な あたたかい、感動できる 思いやりのある、心の広い	動物を飼う、植物を育てる おけいごなどをさせる、レコードを 聴いたり、絵本、童話を読んでやる
2. よい子に (道徳性に富んだ)	正直な、他人に迷惑をかけない、約束を守る、年寄りを大事にする、良い悪いの区別ができる、挨拶ができる	挨拶をきちんとさせる 良い悪いを教える よく意見を聞く、その都度話し合う
3. 明るい子に	明るい、のびのびした	好き嫌いをなく食べさせる 外あそびをよくさせる みんなと仲よくあそぼせる
4. 粘り強い子に	責任感がある 粘り強い 最後まで何事も頑張る	地域活動に参加させる
5. 元気な子に	自分のことは自分でする 自分の意見ははっきり言う 自分で考えて行動がとれる	いろいろな体験をさせる 手伝いをさせる
6. 子どもらしい子に	他の人と同じように 女の子らしく、常識的な 誰とでも仲よく	特にしらない 親が手本となる 親の生活をみていけばよい

親の子どもに対する期待像は、学科別、兄弟数、大学別による差はみられず図6のように分類することができる。男女差は、M大での親の標本数が少なかったため集計基準に記載されていないが、男らしい、たくましく、丈夫な、いい大学に、いい成績で、運動もできるといった内容のものが多くみられた。

記述式で複数回答のため数字は記載しないが、子どもに対する期待像は順番に並べると、1.が圧倒的に多く、次に、3.、2.、6.、5.、4.といった順位となる。

しかし、4.、5.は非常に少ない。これは、母親が子どもに期待する特性として、男性役割、女性役割への期待の違いが示され、女兒には伝統的な女らしさ、協同性を期待していると思われる。

期待像を達成するためにはどのような方法をしたかという点では、特別何もしないと回答したものの11.5%、無記入19.2%を合わせると30.7%となり、意識をして子育てをしないのか、夢中で育てたのか、自然と育つと考えたのか、学生の親の声には「そんなこと、考えてもいなかった」とか「気がついたら大きくなっていった」と言って記入できなかったことが報告されている。

この期待像を受けて、しつけに関連する質問についても図6の方法と同様の行動をみることができる。そして、ここでも、当時のしつけが現在お子さんにどのように生かされているかといった質問では、生かされている点がありません

はつきり述べられないこと、少数であることであり、しつけも特別なないと回答したもの、無記入を合わせると12.6%であった。しつけが生かされていない点では、後片づけができない、整理整頓ができない、物事を親に相談してから決め自分でできない、言葉が乱暴であるといった内容の順になっている。

生かされていない点に関する無記入が59%あることは、どのように解釈すればよいのであろうか。

現在小・中学校に対する生活指導内容として「基本的生活習慣」への要望が第1位にあげられ、一方で83%の親は「しつけがうまくいっている」と回答していると述べており、しつけの内容、方法に問題があり、そこにはしつけを「礼儀」「立居振る舞い」「言葉づかい」などと一面的に捉える誤ったしつけ親が介在していることが報告されている。実際は、それほど意識をして子育てをしていないので書けないと捉えるのか、旨くしつけがなされていて、生かされていない点がないと理解されるのであろうか。

まとめ

領域「健康」と基本的生活習慣、親の養育態度から、どこにどんな問題があるのかを考察してみたのであるが、基本的生活習慣の自立は年齢相応に発達している傾向がうかがわれた。このことは身体面からの発達であり、発達と自立に対する考え方は、親の基準にかなりの相違点があることが見出された。

どの程度までをひとりやせようとしているのか、どこまでできれば、達成したと考えているのか、内容はどんなもの、どんな順序でやらせたいのか、といった具体的内容が把握できなかったが、基本は各個人の達成基準、自立程度を自覚した上で育児に望まなければならないということである。

達成動機の高自立訓練を意識的に母親が行なった場合、達成動機の高い子は高い自立を示し、達成動機の高い子どもは、逆に依存欲求が強くなるとされている。しかし、子ども自体にも生来的な行動基準があり、それが母親の養育方針と一致すれば、よい方向へ育成されていくと言われてい

るが、ここでは親の方針に一貫性、基準性がみられなかったことである。

例えば、人見知りの行動も年齢にかなりのバラツキがみられたことから分るように「人見知りとは、どのような行動のことか」といったことが把握されていないのではないかと推察されるのである。

基本的な生活習慣も達成されているように見えるが、収納場所（おもちゃ、衣服）は80%以上が決まっているにもかかわらず、自分で服の組み合わせをさせていない。

このことは、自分でするという行為と、衣服の色や取り合わせのバランスも自然に身につけてくると考えられるからである。

また、洗濯物をたたむ手伝い（役割）をさせ、自分の物はきまった収納場所に片づけさせるという習慣がなされていないため、しつけが生かされていないという点で後片づけ、整理整頓の未熟さが現在出てきているのだと思われる。

その他

○ひとり寝の習慣、特に男子についていないこと。

○入浴時も自分で洗ったり、拭いたり行動が少ないこと。

○後片づけをしない、言われてからするといった行動が多くみられたこと。

○外での遊び行動が少なく、工夫して遊ばれている傾向がみられないこと。

○スプーン、はしが上手に使えるといった項目も半数である。それが正しく使えるためには、正しい持ち方を教えていなければならないし、習慣化されなければならないのであるが、現在の学生の姿から習慣が身についたとは思えないのである。

以上のことから、自立行動をするためには、家庭における基本的な生活習慣が確実に身につかなければならず、特に「幼児期」になされなければならない。親自身が子どもに対し、どのような人間に育てたいのか、そのためには何が必要なのかという問いかけをすると同時に、身のまわりの始末は自分でできるようにさせることが、自立への第一歩であり、1人前になるための条件である。

そのような観点から、改めて基本的な生活習慣の内容を確認する必要があると思われる。

また、女子に対する期待像も、それぞれの親によって相違しており、母親自身の特性も反映している。

その親の影響が自立への行動を左右し、自分が将来、子育てをする時の基準となることから、そこに焦点をあてて、今後の幼児教育のあり方、家庭のしつけのあり方、学生の余暇行動に参加させるための指導方法を研究課題としたい。

文献

- 1) 文部省「幼稚園教育指導書一般編」 1969
領域編「健康」
「言語」
「音楽リズム」
「自然」
「社会」
「絵画製作」
- 2) 全国社会福祉協議会「保育所保育指導」
全文とその見方 1973
- 3) 大月書店「子育てと家庭の役割」和田典子 1985
P.101
- 4) 講談社現代新書「ことばを失った若者たち」
桜井哲夫 1986 P.123、160
- 5) 朝倉書店「幼児心理学」山下俊郎 1986 P.310～348
- 6) 日本保育学会「家庭の養育態度」 1985 P.19～20
P.78～79
- 7) 日本文化科学社「幼児心理学講座3」藤永保 1975
性格とパーソナリティ P.143、144
- 8) 岩波新書「子どもとことば」岡本夏木 1985 P.62
- 9) “ 「ことばと発達」岡本夏木 1985
P.156、157
- 10) “ 「小学生になる前後」岡本夏木 1984 P.32
- 11) 中公新書「伸びてゆく子どもたち」詫摩武俊 1985
幼児期の家庭教育 P.51～53